

津山郷土博物館だより「つはく」

津博

TSUHAKE

2015. 10 No.86

トピックス

夏の学習プログラム
ミニ企画展「津山藩主森家と黄檗宗」
国絵図研究会津山大会

資料紹介

手押しの消防ポンプ 梶村 明慶

研究ノート

米沢に残る廣瀬臺山の書状 尾島 治

お知らせ

今後の行事のご案内

(表紙写真 国絵図研究会津山大会の様子)



津山郷土博物館

Tsuyama City Museum

グラム

平成27年度は、夏の学習プログラムとして、「陶棺をつくろう」「勾玉をつくろう」「トンボ玉をつくろう」「カルメ焼きをつくろう」を実施しました。計107名の参加があり、それぞれの教室に参加したみなさんは、熱心に取り組んでいました。

カルメ焼きをつくろう

佐良山小学校 4年 河本凌太郎さん

カルメやきの作り方がわかったからいえでもつくってみようと思った。

カルメやきのふくらんでいるところがおもしろかった。めろんぱんみたいな形になった。少したべてみるとあまくておいしかった。

東小学校 5年 田淵直也さん

カルメ焼きはふくらめば、ふくらむほど大きくなるんだなあ。最初は、さとうだから、白色だったけど、最後は黄色に変わった。水を入れる時はしんちょうに注いだ。



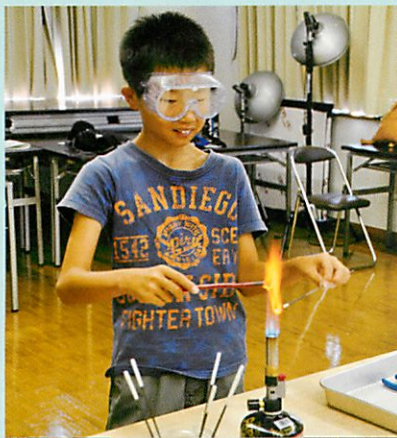
楽しんで
もらえたかな?



博物館キャラクター「鶴若」



トンボ玉をつくろう



弥生小学校 5年 後河藍さん

大きくしすぎたら、われるということがよく分かった。だいでできるようになると、ついよくがでて大きくしすぎた。いい色ができたから、とってもうれしかったです。6年生になっても、もう1回してみてもいいかなと思います。とってもおもしろかったです。

高野小学校 5年 山本亜紗美さん

最初はむずかしそうだと思ったけど、一つ目をやったときとても簡単だった。最後のトンボ玉を作ったときは、とても上手に出来た。焼けた直後は何色かわからなかったけど、だんだん何色か、分かるようになってきたのが、とてもおもしろかった。とても良いけいけんが出来たと思います。楽しかったです。



一宮小学校 6年 松尾美佑さん

最初はとてもきんちょうして、こわかったけど最後にはとても楽しかったです。またできる時があればやりたいです。

トンボ玉が一番きれいだったのは青色と黄色のくみ合わせでした。

みんな真剣に
取り組んでいるね。

陶棺をつくらう



博物館キャラクター
「ファイアー」

夏の学習プロ

津山西小学校 5年 福本光琉さん

さいしょ形をつくるのがにがてだったけどだんだん楽しくなってきました。あとむかしの人の火おこしはたいへんだったんだなと思いました。それに郷土博物館ではみまさかのきちょうな物が保管されているのを知りました。とても楽しかったです。

中正小学校 6年 岡安宏樹さん

作るときは粘土を縄のようにして作っていったけど、完成したときには、きれいにできたのでよかったです。陶棺を焼くときも注意しないといけないことが分かりました。

清泉小学校 6年 早瀬巧望さん

陶棺作りでは、ねんどを一つ一ついねいにつなぎあわせないとわれたり、ふたと本体をまっすぐ切り分けたり、もようをほったりと、とても大変だったけど楽しかったです。

陶棺を焼いてもらっている時は、どうゆうふうにか焼くのかや、昔の火のおこしかたをしてみたりしてとてもいい体験ができました。

館内を案内してもらった時は昔の歴史を学んだり見たりと、いい勉強になりました。

今回の陶棺作りをとおしてとてもきちょうな経験ができてよかったです。



勾玉をつくらう

鶴喜小学校 1年 保田実来さん

けずるのがたいへんだったけどさいごまでがんばりました。

西小学校 2年 奥井彩加さん

まが玉をけずるところをがんばりました。さいご、みがくところがたのしかったです。みがくとつやつやになってうれしかったです。

高野小学校 4年 遠藤蒼太さん

ぼくは今までまが玉をつくったことがないのでごくたのしかったです。さいしょ、かどがあった石だったけどすごいつるつるになってびっくりしました。これからいろいろな工作をしたいです。今日は楽しかったです。

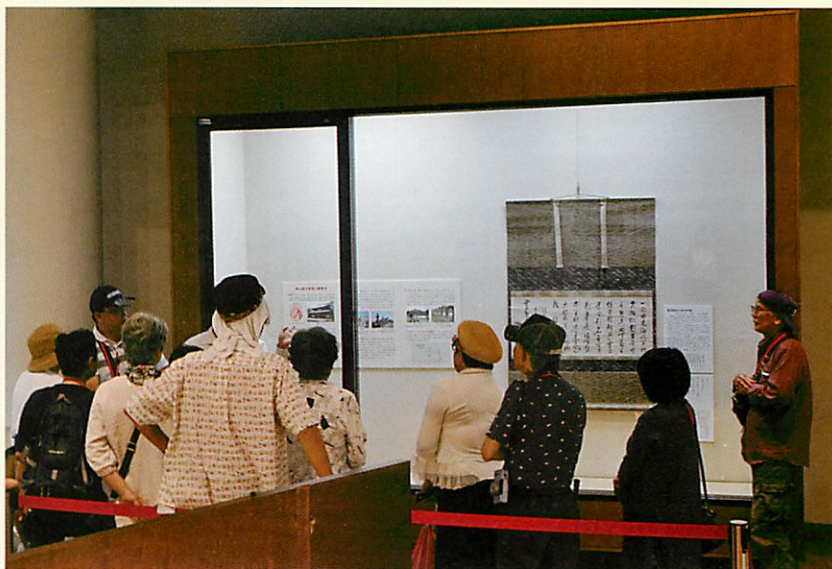
東小学校 5年 山下紘輝さん

自分の好きな形の勾玉ができて嬉しかった。角を丸くするところがむずかしくて、表面をみがくところが楽しかったです。



ミニ企画展「津山藩主森家と黄檗宗」の開催 【7月18日～8月30日】

前号の研究ノートでも紹介した、黄檗宗の高僧・隠元おんげんの書を展示し、森家と黄檗宗との関係を紹介するミニ企画展を開催しました。この書は、寛文4年（1664）の暮れに五十回忌を迎えた溪花院（津山藩主森長継の生母）の供養のため、長継が隠元に依頼して書かれた七言律詩の詩偈しげで、昨年末に倉敷市内の寺院で見つかり、隠元の真筆と判明したものです。夏休みの期間中で、多くの方々にご覧いただきました。



国絵図研究会津山大会の開催 【9月22日】

9月22日、国絵図研究会（代表：茨城大学教授 小野寺淳氏）の津山大会が開催され、会員20名が当館収蔵の絵図資料を閲覧されました。平成8年に発足したこの研究会は、全国各地の国絵図の閲覧調査と研究会を年に2回実施し、絵図研究者の学際的な交流の場となっています。

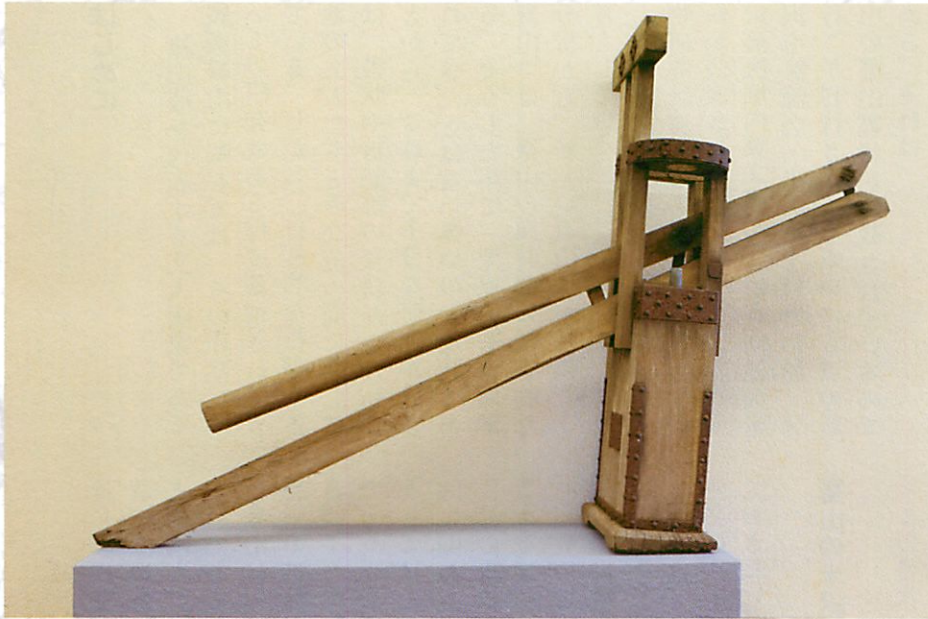
3年前に当館で開催した特別展「江戸時代の地図づくり」以降、存在が知られるようになった美作国絵図など、大型の絵図資料を中心にご覧いただきました。会員の皆さんは、カメラやメモを片手に終始熱心に絵図を見つめ、疑問点や意見を交換していました。この大会開催が、美作国絵図の研究進展につながれば幸いです。



皆さん熱心に見入っていますね。



手押し消防ポンプ



手押しの消防ポンプ

竜吐水の絵
(津山藩火消しの図より)



放水口



柄の部分「河辺村大字瓜生原…」とある

これは、主に消防用に使用されていた手動式のポンプです。「水鉄砲」または「竜吐水」とも呼ばれていました。「竜吐水」といえば、主に絵図のような数人で担ぐ大きなものを指しますが、写真のような一本筒の小型なポンプも「竜吐水」と呼ぶことがあったようです。

竜吐水は天明の頃オランダから輸入された揚水ポンプが基になっており、消火用のみならず、農業用揚水、または銅山の水抜き用としても使用されています。

このポンプの底には水を吸い上げる穴があり、それを水桶などに漬け、上部の横棒を上下させることで、吸い込み口から水を吸い上げ放水しました。放水用の筒は失われていますが、筒を差し込んでいた場所の部品は残っています。

また、柄の部分を見ると「河辺村大字瓜生原」と書

かれています。明治22年の町村制実施にともない、瓜生原は河辺村の一部になったことから、明治時代以降も現在の津山市瓜生原地区で使用されていたものと推測されます。

大型の竜吐水は、延焼を防ぐために水を撒いたり、火消しの衣装に水を含ませたりするために使用されたとされています。それほど消火能力は高くなかったようです。大型のものでもこのような状況でしたので、このポンプの消火能力についてもそれほど期待できるものではなかったと思われます。

この度、瓜生原の旧家で所蔵されていたものを当館に寄贈いただきました。おそらく、初期消火のために、自家用、もしくは地域用に備え付けられていたものの一つであつたと思われま

梶村 明慶

米沢に残る廣瀬臺山の書状

尾島 治

はじめに

津山藩を代表する文人画家である廣瀬臺山に関しては、その作品についての研究はある程度蓄積されてきている。しかし、日常的な行動や各地の文人たちとの交流の面に関しては、書状や日記等の資料が少ないことから、これまで十分な研究が成されてきたとは言い難いのが現状である。そうした中で、栗原直著『廣瀬臺山』は、臺山の漢詩稿の編年的な分析から、新しい臺山像を提供しようとしている。

このような状況の中で、臺山の人物研究に資すると思われる貴重な資料が公表された。平成二十七年に『米沢藩医堀内家文書』（一般社団法人米沢市医師会・米沢市上杉博物館 発行）が刊行され、その中に二点の新出の臺山書状が掲載されているのである。それは、

①第八〇号（年未詳）二月五日

堀内忠意宛 広瀬台山書状

②第八十一号（年未詳）正月二十

一日 堀内忠意宛 広瀬台山書状の二点である。

これら二点の臺山書状は、その希少性と共に内容的にも興味深い書状資料であり、今後の臺山研究の進展のためにも、その内容を検討しておく必要があるだろう。①第八十号書状

は、堀内からの書状への返書で、猪茸やなめ茸の贈答などと共に、臺山と堀内との画を介した交流が伺える資料である。また、堀内からの手紙を臺山に届けた純父が、神保蘭室の息子の神保甲作であれば、米沢藩儒者親子との深い交流にも関わる資料である。②第八十一号書状は、出来事としてはよく知られた臺山の米沢訪問に関わる内容であり、また、画の作品の提供や斡旋なども伺える資料である。

宛先の堀内忠意は米沢藩医で、寛政八年には上杉治憲の御側外科医となつた人物である。

今回は、臺山の米沢訪問に関連した②第八十一号書状について検討しておきたい。

臺山の米沢訪問

この書状では、新年の挨拶もそこに、前年の米沢旅行の際の礼が述べられている。ここでは「誠二旧冬者御深情被成下忝仕合偏大恩二よつて寒威にも不被侵雪嶺をも越行路無恙二二十六日帰府仕候」とあり、米沢から大雪の中を無事に江戸まで帰ることができたと伝えている。

臺山が米沢を訪問したのは、文化二年の暮れで、分かっている限りこの一回のみである。よって、この書状は

米沢訪問の翌年、文化三年正月二十一日付け書状と推定できる。

この米沢訪問に関しては、詳細な日程や行程は不明である。ただ、臺山の残した漢詩から、ある程度は推測することができる。そして、今回の書状が更にその日程に関する情報を提供している。栗原直著『廣瀬臺山』所収の臺山の詩を参照しながら、日程と行程について考えてみたい。

臺山の文化二年頃の詩として、

「遊米沢過板谷嶺□号

十月寒風客意孤

李山板嶺軋崎嶇

雲生咫尺晴還雪

天外銀峯忽有無」

という詩がある。これは、福島から米沢に向かう途中の板谷嶺を越えた際の詩であり、十月に板谷峠を通過していることが分かる。十月二十日には、上杉鷹山に拝謁しているのであるから、十月の初旬には江戸を出発していたのであろう。ちなみに、米沢藩の参勤交代では、順調にいつて米沢・江戸が八日前後の行程である。一般の旅では、十日前後だったときれている。

その後、米沢では神保蘭室の元に寄宿して過ごし、江戸に帰ることになる。米沢での上杉鷹山や斉定との拝謁が十一月十六日まで記録されていることから、少なくとも、米沢を

出発したのはそれ以降であるが、その帰りの日程は推測するしかなかつた。

さて、米沢から江戸に帰る途中の詩では、次のような作品がある。

「米沢帰路雪中白川駅作

千里離家三破月

吟節無恙興無端

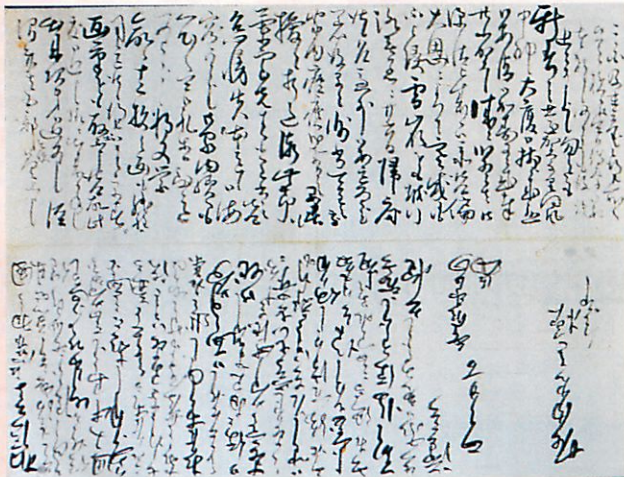
来日白川度紅葉

帰時青峰雲中看」

とあって、十月の紅葉の中をやつて来た米沢訪問が、今、三ヶ月を経て雪雲に隠れる峯を見ながら帰路についている様子が詠じられている。すなわち、江戸を出発して米沢を訪問した十月から、三ヶ月を経た十二月に江戸への帰路についていると考えられる。この正月二十一日の書状では、二十六日に帰府したとあることから、詩の内容と合わせ考えれば、文化二年の十二月二十六日に江戸に着いたと推定できる。

米沢での臺山

米沢での最大の収穫は、上杉鷹山への拝謁であつた。『上杉家御年譜十』「治憲公御年譜卷二十九」には、文化二年十月二十日の条で、「神保綱忠へ寄宿ノ広瀬台山、津山ノ藩士、御書院へ被召出御意ヲ賜ヒ溜ノ間ニ於テ御料理被成下御書齋へ召出サレ御席



廣瀬臺山書状（米沢市上杉博物館蔵）

画ヲ命セラレ御前御酒賜フ」とあり、また、同年十一月十六日の条には「広瀬台山為御話御書齋へ被召出御席画ヲ命セラレ御料理成下サレ且銀五枚賜之」と記録されている。この治憲は既に隠居している鷹山のことである。この内容は、『上杉家御年譜 十三』の斉定の年譜にも、次のようにやや簡略に記載されている。十月二十日「作州津山ノ藩士広瀬台山来着 神保督学ニ寄宿ノ所 能画ノ者ニ付召出サレ御席画命セラル」。また、十一月十六日の条では、「御書齋ニ於テ広瀬台山召出サレ御席画仰付ラル」とある。この時の藩主は治広であり、斉定は次期藩主となる世子であった。

すなわち、臺山は上杉鷹山に拝謁し、席画を命じられているのであり、その時の記事が斉定年譜にも記載されているということは、臺山は世子の斉定にも拝謁していると考えられる。このことは、臺山が「陪米沢侯世子宴賦歳杪抄」という詩を残していることから裏付けられる。米沢で二ヶ月近く滞在していた臺山は、神保蘭室や上杉鷹山あるいは世子斉定との交流だけではなく、堀内忠意のような文人たちとの交流や、米沢周辺の遊山も十分に愉しんでいた。例えば、米沢藩主の好んだ温泉として有名な丹泉（あかゆ）温泉を訪れており、温泉と丹泉八勝のひとつ雲夢樓の眺望を詩に詠じているのである。

画を介する交流

この書状の中で臺山は、「蒙命候十

二枚之画」に関して、紙を用意しているがまだ着手していない。今回は届けることができず、出来上がり次第送り届けるとしている。これは、堀内から十二枚の画の製作を依頼されたもので、販売であったかどうかは分からないが、明らかに注文製作していたことを示している。あるいは、「命」以降を平出していることから、堀内を介しての上杉家からの依頼なのかも知れない。

また、それに続けて、「桐隠公子」に依頼してある「関羽之像」についても、製作用の絹を渡してあるが、まだできないので「随分無油断催促仕候」と、仲介した責任を果たすことを約束している。そして完成次第送り届けると述べているのである。この桐隠公子というのは、片桐蘭

第八一号（年未詳）正月二日

堀内忠意宛 廣瀬臺山書状

二白及末筆候得共、くれぐれ皆々様江直御伝声御礼奉願候、何事も後便追々可申上候、勿々以上

新春之慶賀千里同風申納候、大慶御揃被成慰御安清御加寿可被成恭賀候、誠二旧冬者御深情被成下恭仕合、偏大恩二よつて寒感にも不被侵、雪嶺をも越行路無恙二廿六日帰府仕候、乍慮外御安意可被下候、着後早々謝書可呈

蘭室先生も呈書之仕合急慢失本意候、御海容可被下候、御家内様へもくれぐれ宜御礼等御致意可被下候、将又蒙

命候十二枚之画も、紙匣八用意仕候得共、いま早春画筆をも取出不申仕合故、此度御廻申候様二出来かね申候、出来次第御廻可申候、涇渭弁

は五部今便差上申候、桐隠公子江関羽之図、是も絹遺置候、急二出来かね候、随分無油断催促仕候而、出来次第御廻可申候、且又此品とも甚如何ながら懸御目申候、都下之画とも取集候而進上と兼而奉存候、早春、また諸家之発会二も時々出かね相集かね申候、追々取集進上可仕候、御画事如何御便二拝見奉希候、御地春寒如何、此地者十分之春色鶯花世界二御座候、乍去いまた郊行も不仕、紛冗消日申候、何角申上度奉存候得共、今日も多書相認候而、甚つれ早々申留候、万々後便可申上候、乱書失敬御免可被下候、恐惶謹言

正月廿一日

堀内忠意様

人々御中

廣瀬臺山

清風

おわりに

文人画家廣瀬臺山に関しては、優れた絵画作品と共にその思想についても研究すべき点が多々ある。そして、彼の思想と絵画とをその行動を関連づけることにより、その人物像と共に江戸時代の文人や文人画家について考察を進める貴重な材料が得られるであろう。臺山と交流のあった人々の元に残された書状等の資料が、今後も更に各地で公開されることを期待したい。

今後の行事のごあんない

●第107回文化財めぐり「森長継の生母・溪花院ゆかりの史跡探訪」

日 程：12月6日(日)

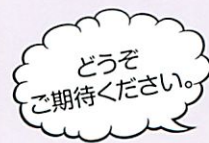
訪問先：妙願寺(戸川町)・溪花院跡(西寺町)・本源寺・宗永寺(小田中)



(写真 左から順に：妙願寺にある溪花院墓碑、西寺町の溪花院跡、宗永寺の森家墓所)

前号の研究ノートと本号のトピックス(4ページ)で紹介した隠元の手紙は、津山藩主森長継の生母・溪花院の五十回忌供養のため、長継が隠元に依頼して書かれたものです。この資料に関する調査の中で確認できた、溪花院にまつわる市内の史跡を訪ね歩き、森家の歴史を振り返ってみたいと思います。なお開催当日は、溪花院が亡くなってからちょうど400年の命日に当たります。会員の皆さんや7月の関連講座の聴講者には、後日改めて詳しいご案内を差し上げますので、ぜひご参加ください。

※「津博」84号の行事予定に掲載している、
来年3月19日(土)の文化財めぐりも、予定どおり実施します。



つきよのすけ
博物館キャラクター「津郷之介」



博物館だより「つはく」
No.86 平成27年10月1日

津博
TSU-HAKU

【編集・発行】津山郷土博物館

〒708-0022 岡山県津山市山下92
Tel (0868) 22-4567 Fax (0868) 23-9874
E-mail tsu-haku@tv.tn.ne.jp

【印刷】有限会社 弘文社

入館のご案内

【開館時間】午前9:00～午後5:00

【休館日】毎週月曜日・祝日の翌日

年末年始(12月29日～1月3日)・その他

【入館料】一般…200円(30人以上の団体の場合160円)

高校・大学生…150円(30人以上の団体の場合120円)

中学生以下・障害者手帳を提示された方・
市内在住の65才以上の方は、入館料が無料です。